

Title	接吻の日本文化史
Author(s)	西澤, りょう
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2001, 35, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47878
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

接吻の日本文化史

西澤 りょう

一 接吻は輸入品か

現代の辞書、例えば『大辞林第二版』は、接吻を「相手の唇や手などに自分の唇をつけること。愛情や尊敬の気持などを表す。口づけ。口吸い。キス。〔幕末期の訳語〕と説明する。愛情、尊敬にも多様なかたちがあり得るが、現代のわが国で接吻は、人間相互の関係の中でも、特に「恋愛」と称されるものを象徴する接触と捉えられている。「眠れる森の美女」など、童話でも描かれているその行為は、現在、エロスとアガペの接点となる詩的な所作として、広く受け入れられている。

大辞林に「幕末期の訳語」とあるように、語史を紐解けば、唇の接触を指すために現在一般的に用いられている「接吻」「キス」「口づけ」等の語はいずれも、明治以降に普及した翻訳語であることが知れる。この事実を受けるように、明治期に日本を訪れた西洋人が、日本には接吻の風習は全くないということを明言している例も認められる。例えば、ラフカディオ・ハーンは『東の国から』において「日本の文学のなかには、接吻は絶対に存在してい

ない」と断言し、チェンバレンは『日本事物誌』で「わがヨーロッパで普通の題材となっているものの大部分が、日本の詩歌では明白に欠けている。(…)ソネットを書いて恋人の肩に捧げる者もない。(…)ましてや、恋人にキスすることを暗示するような失礼なまねはしない」と言い切っている。

しかし同じ時期に、こうした「日本人は接吻せず」という風説に異を唱えた日本人もいた。例えば、夏目漱石のノート [Expression] には、次のような一節がある。

Darwin 曰 日本人ハ Kiss セスト (Mantegazza [Physiognomy and Expression] 139) 余曰ク Kiss embrace ハセザルニアラス人ノ前ヲ憚カルナリ。

そして大正十年の『性之研究』には、「愛の表象としてのキスが本邦に古くからあった」ことを、『御伽草子』や『今昔物語』などに見られる「口吸い」という行為を引くことで証立てた「東洋の古書に見えたキス」という論が、南方熊楠によって発表されている。この「口吸い」という口腔接触を指す語は、ハーンらの指摘通り、王朝文学や和歌では扱われていない。しかし、日記や説話集、狂歌や俳諧発句集の類においては、熊楠が示唆したように、しばしば見られる語ではあった。

本論ではまず、古来の「口吸い」の性質について、「接吻」との差違を資料から確認し、「口吸い」と「接吻」の差が産み出した文化間の齟齬について検討する。ついで「恋愛」の象徴として描写され出した「接吻」に対する、過渡期の文学者の態度について、特に漱石をとりあげ、彼の接吻をめぐる叙述と、自作品への行為をとりこむ手際にある振幅、警戒と憧憬の二律相反について確かめてみたいと思う。

二 「口吸い」の時代

見いだせた限りでの最も古い「口吸い」についての叙述は、八九八年の紀長谷雄による「昌泰元年歳次戊午十月二十日競狩記」（『紀家集』所収）のものである。

好風朝臣、數稱舊少將、探其懷吮其口、戲言多端、不可□□（具言）

鷹狩りの後の酒宴の席で、色好みで知られた平朝臣好風が、遊女の胸元を探り口を吸ったことが記されている。酩酊した遊び人によって、遊女に対して、胸を触ることと同時になされていたのが「口を吮う」行為だった。⁽¹⁾

この初期の例をはじめ、「口吸い」は遊女、女郎と関係して描かれる場合が多かったようだ。例えば、『難波物語』（一六五五年頃成立）には、

をろかなるかな、もろこし人も、一双玉髻千人枕、両片朱唇万口嘗と、詩につくりて、いやしめるけいせいを、しみてのちは、わが物のやうにおもふ事、手をあて、大海をせくに異ならず

とあるが、この「一双玉髻千人枕、両片朱唇万口嘗」は、明の作詩の参考書『田機活法』に出てくる用法であり、この表現は女郎の立場を端的に示す成句として、中国、日本で用いられていたものである。「うかれ女の身は定めがたく。（略）紅舌を萬客になめさせ。」とは、井原西鶴『武家義理物語』にも見え、また、山東京伝『本朝醉菩提』にも「冥土の鳥のほととぎす、血を吐く紅の唇は萬客の嘗ものとなり」と、女郎について、地獄に墮ちる者として「舌を、唇を嘗めさせる者」と呼ぶ表現が同様に認められる。「舌を、唇を嘗めさせる」行為は、性の交わりを端的に象徴するものと捉えられていたことが思われよう。

ここで、舌を嘗めさせる者、とある点から、「接吻」とは異なる、「口吸い」の特徴がうかがわれる。すなわち「口吸い」は、唇以上に舌の接触吸引が重要であった接触だったらしいのである。例えば、山東京伝による滑稽絵本『小紋雅話』には、「口吸い」をデザイン化した「口口小紋」という凶案が収録されている。この凶案で、触れ合わされているのは、唇の間から突き出た舌先である。この他、「口吸い」場面を描いた幾多の春画、例えば歌川國定『春色初音之六女』等において、舌同士に触れ合いの描写に力が入られているのが確認できた。舌の接触にその特徴があった「口吸い」は、唇同士の接触がイメージされる現代の「接吻」よりも、生々しく露骨な肉の行為であったようだ。

三 「接吻」伝来

祝福の礼としての口腔接触「接吻」は、キリスト教と共に、室町末期に日本に伝えられた。宣教師たちが、日本人に受け入れられやすいように配慮しながら編んだ教義書、聖人伝などにおいて、「博愛」の意味の「愛」を、その語の意として当時の日本で一般的であった、「愛欲」の愛ととられぬよう、「ご大切」という言葉であらわしていたことはよく知られているが、後に「接吻」と名付けられる行為にも、「口吸い」とは違う、特別な訳語が考え出されたのであり、ギリシヤン文章で「接吻」は、例えば、「いたたく」「面を吸ふ」「顔を顔にあてる」、「拝む」等の語で翻訳されている。⁽²⁾「口吸い」の持つ生々しい肉欲の印象を避けるため、宣教師達は訳語に注意を払ったようである。

『西語の漢語訳「接吻」は、中国で考案されたものらしく、乾隆四十二年（一七七七年）の序のある「西域見聞

録」巻四、外藩列伝のオロシアの風俗を記した部分に見られている箇所があることが新村出によって指摘されており（*新村出「語詞の出典」『文芸春秋』昭和三〇年八月）、これが最も古い用例らしい。日本においては、ヘンドリック・ドゥーフによる、『道訳法児馬』（一八一五年）いわゆる「ゾーフ辞書」に、蘭語 *Kiss* の訳語として用いられたのが最初であるといわれる。この訳語は幕末から翻訳聖書において採用され、明治二十年代の翻訳小説でも多く採られて、定着していった。キリスト教文化圏での「聖なる挨拶」という側面も加えられて、舌を触れ合わせ、吸うことでなく、唇の「接」触に主眼を置く触れ合い、「接吻」は、次第に輸入された概念「恋愛」のシンボルとして捉えられるようになる。

初期にはもっぱら翻訳小説においてのみ描かれた接吻は、明治三十年代半ばより、詩歌、特に新体詩の分野で、甘く熱い恋の場面を彩るモチーフとして、特に「くちづけ」という語でうたわれた。そして、明治末までには、当代の日本が舞台である小説でも、接吻は「恋愛」を象徴する意味深い行為として描かれるようになっていった。

明治という、「くちすい」から、*Kiss* の訳語としての「接吻」への移行の過渡期には、二つの習慣の異質性をもたらす差違が、日本側からも、東西の文化差が露わになる場として意識され、多く言及された。この言説はわずかな間に激しく変化していった。まず、明治初期には、日本で従来からあった「くちすい」の感覚を基本において、接吻をみだらな行為ととらえ、西洋は慎みがなく、野蠻であるためにそれが公の場でも見られるのだとする立場があった。『明治事物起源』に記されている、明治四年の洋行のおり「日本人として初めて接吻の風俗に接した」という西園寺公望の、「日本人より見れば、堪へざる事。奇と云ふべし。蓋し夷狄の惡風、眞に厭ふべし」という感

想などがその一例である。その後、例えば明治二十年代の事情は、尾崎紅葉の『風流京人形』（明治二十一年）に描かれた、文学青年がバイロン詩集によって恋愛を夢想し、「接吻ア——ッ」と身悶える場面への、『女学雑誌 第百五十七號』（明治二十二年）の文学批評欄における辛辣な批評に物語られるだろう。「あられもなし。猫の戀を咏みて破門せられし人もあるに、是はまたいかな事」と批評子は呆れ、「作中に「接吻」に触れる描写が頻出するのは）著者自身の品格を下すものと云ふべし。（略）文庫の小説は果して真正の——純粹のラブを描きしものなるか。趣向を立てる時には少しく道徳の分子を加へ給ふこと必要ならぬ」と酷評する。純粹の「ラブ」——未だ訳語「恋愛」は出ないが、それ以前の日本での「色恋」と異なる新概念としての「ラブ」については読書家の間で了解されていても、この明治二十二年という時点では、未だ、接吻にはかつての「口吸い」の印象が強く、それは神聖なラブとは相容れないふしだらな行爲と考えられていたことがわかる例であろう。ところが、明治も三十年代に入ると、日本での従来の「口吸い」も、愛するひとへの情愛の所作「接吻」と見て、日本人は慎み深いゆえにそれが公の場で見られないとする立場もあらわれてくる。例えば、新渡戸稲造の『武士道』（明治三十二年）は、人前で接吻をしないことを、日本人の節制、感情抑制という美質の一例として取り上げている。

このように、日本人の「接吻」に対する意識は、明治期を通じて大きく変わっていった。ここからは「口吸い」と「接吻」の間で戸惑い、この差違を鋭く観察した人物、「接吻」をいぶかしみ、また一面でその象徴する觀念に憧れ、そして作中において独自の接吻を表現した作家として、夏目漱石について見ていきたい。

四 漱石と接吻——文化差の象徴として

英国留学中の漱石は、目の当たりにした接吻の風習に対する違和感をたびたび書き記す。例えば、明治三十四年三月十二日の記録には、「西洋人ハ執濃イコトガスキダ華麗ナコトガスキダ 芝居ヲ観テモ分ル食物ヲ見テモ分ル建築及飾粧ヲ見テモ分ル夫婦間ノ接吻や抱キ合フノ見テモ分ル」と、西洋の「華麗さ」と「しつこさ」の顕著な例として夫婦間の接吻が公にされる習慣をとりあげた箇所がある。また、同年五月二十二日の記録には、公園において睦み合う、複数のカップルの間で交わされる接吻を見たことによる、「妙ナ国柄ナリ」という不審感が記されている。

また、彼の「Love」と題したノートの中には、「Modern notion of love has nothing to do with sexuality.」愛についての現代の概念は全くセクシュアリティと関係がない、と書いた部分があり、ここで漱石は接吻について触れる。現在の西欧が愛をセクシュアリティと離して考えている証拠として、「(1)猥褻ナル言語ヲ慎ムコト。スグ顔ヲ赤メルコト。此点ニ非常ニ delicate」であるのに、「(2)然ルニ男女双々携手又ハ舞踏又ハ接吻又ハ公園杯ニゴロゴロスルコト」をあげる。西欧は、意図的に性愛と性欲を技巧によって区別した結果、こういうことになった。しかし、彼等がこの二つを自ら完全に区別出来ていると信じているのも、「self-delusion」だともいったうえで、彼は「日本ハ仏教、儒教、ノ結果 (love and passion) テアル兩者離レテ居ラヌ故ニ(2)ノ現象ヲ見テ驚ク」のであると分析する。漱石は、西洋と日本では「愛」への観念が違うことを意識し、口腔接触にある差違を、その象徴として受け止めるようになっていたのだった。

そして、このような感想は、『文学評論』（明治三十八年）にまとめられる。この序言では、「趣味と云ふ者は一部分は普遍であるにもせよ、全体から云ふと、地方的（ローカル）なものである」と、社会ごとに異なる歴史や伝説、制度や風俗からそれぞれの地域の趣味というものが出来上がっていることが述べられる。それは人間の行き来が活発になれば、統一され普遍的なものになっていく傾向があり、英仏独等の各国は一般の趣味がすでに「普遍力の作用」を受けている。しかして日本は、それらの国との交際時期がまだ短く、日本の趣味と西洋のそれとの間には依然大きな溝がある、このことを漱石は以下のように例証している。

仮令ば西洋で接吻と云ふことは親類夫婦の間に面会告別の際には礼として行はる、法式であつて西洋人の之に対する趣味も此法式から割り出されて居る。然るに日本では維新前迄は女が男と同衾する位の程度の者である。今でも男女が無暗に接吻する杯と云ふ事は少くとも教育ある社会で公にすべきものではないとして居る。

維新前の「口吸い」と、西洋の伝統である「接吻」。この口腔接触の文化差は、文化圏によつて解釈の地平には差違があり、一方の文化の内部にいる者から他方に対して絶対的な価値判断を下すことは不可能である、という漱石の見解を裏付ける一つの証拠になった。『文学評論』で、漱石は続けて、「所が日本の新体詩人は西洋の詩から接吻と云ふ字を発見して一般の趣味の異なる日本に此字を引入れて来て平気で使つて居る」ことを指摘し、「此字に対する普通の人の趣味は新体詩人が用ひる様な意味を有して居らん」ために、「一種の忌味」を感じ、「嘘を吐いてゐるとしか思はれない」という感想を残している。風俗差を顧みず、安易に詩の中に接吻を歌い込む新体詩人に違和感を感じていた漱石は、『吾輩は猫である』（明治三十八―三十九年）の作中で、文学熱の強い青年、東風の詠じた新体詩に、「くちづけ」の語を登場させていた。

倦んじて薰する香裏に君の／靈か相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、辛きこの世に／あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云って東風君に返す。

「先生御分りにならないのはごもつともで、十年前の詩界と今日の詩界とは見違えるほど發達しておりますから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではどうい分りようがないので、作つた本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人はその他には何等の責任もないのです。…」

この東風の詩は、「渴きにたへぬくちづけの／熱き情はさてもあれ」と歌う、蒲原有明『草わかば』（明治三十五年）所収の「彩雲」、また、三木露風『夏姫』（明治三十八年）所収の「春の夜」の、「渴きては熱き唇／接吻の甘まきに堪えむ」などによく似ている。「あまく」「熱き」「くちづけ」とは、新体詩における「接吻」の定石通りのうたわれ方である。東風の高らかな語調の詩の真意は、しかし、作つた本人にすら定かでない、とされているのは、文芸評論に示された漱石の認識、「嘘を吐いてゐるとしか思はれない」の反映でもあろうか。

五 漱石作品における接吻

漱石も作品中に接吻を描くことがあった。けれど、以上で述べたような意識を持っていた漱石にとって、接吻とは、まず現実の、当代の日本とは違う舞台を要求する行為であつたようで、その場面は例えば夢の中での行為として、または場を外国においた物語での所作として示されている。

例えば、『夢十夜』（明治四十一年）では、死んだ恋人の化身らしき百合の花の「冷たい露の滴る、白い花卉」への接吻が描かれる。ふるえる、香り立つ百合に捧げられる接吻。それは、清らかでありながら艶めかしい情感に溢れた、印象的な場面になっている。

また、幻想的な短編『幻影の盾』、『薤露行』（共に明治三十八年）には、騎士による忠誠を誓った婦人への接吻が描かれている。この二作品は共にアーサー王伝説の時代を題材としており、『幻影の盾』の小解には「是を日本の物語に書き下さなかつたのは、此の趣向とわが国の風俗が調和すまい」と思ったからだと思つたからだと書き添えられているが、古き異国のファンタジーの中で、漱石の筆は情熱を帯びた詩的な接吻を描き出す。

『幻影の盾』の接吻は、盾の中において、騎士と婦人の愛の誓約が完成されるシーンに描かれる。

「南方の日の露に沈まぬうちに」とキリアムは熱き唇をクラ、の唇につける。二人の唇の間に林檎の花の一片がはさまつて濡れたま、ついて居る。

そして『薤露行』、ランスロットがギニヴィアの元を去る場面。

女の前に、白き手を執りて、発熱かと怪しまる、ほどのあつき唇を、冷やかなる柔らかき甲の上につけた。暁の露にげき百合の花瓣をひたふるに吸へる心地である。

『薤露行』のこの場面は、マロリーの『アーサー王の死』の影響下で書かれたものであるの言うまでもないが、マロリーのテキストではここに接吻はなく、その他の場面での接吻も、詳細な描写をとまなわず、ただ“Kiss”と書かれているだけである。接吻へのこの形容は漱石自身が編んだものと考えられる。

こうして見てくると、漱石による接吻の場面には、露に濡れた花びらのイメージがよく共に示されていることに

気が付こう。熱い唇が、濡れた、冷たい、芳しい白い花弁に接する。甘く熱いだけでなく、冷たくもあるような接吻を、肉体の熱が冷ややかな美しいものによつて受け止められるイメージを、漱石は好んでいたようである。このために、漱石の手による接吻場面は、甘い香りに満ち、濃密な官能性をたたえながら、理知的で冴え渡った、清冽な感覚をも漂わせるものとなっている。

また、唇を受け止める白い、冷たいものが、女の肌そのものであることもあった。その女がすでに息絶えている場合には、『薤露行』で、「凡ての屍のうちにて最も美しい」と描かれる、白い薔薇に抱かれた乙女エレインの亡骸は、王妃ギニヴィアの唇を静かに受け止める。

読み終りたるギニヴィアは、腰をのして舟の中なるエレインの額——透き徹るエレインの額に、顛へたる唇をつけつ、
「美くしき少女」と云ふ。同時に一滴の熱き涙はエレインの冷たき頬の上に落つる。

ここでも、白い花、冷ややかな肌、そして熱い涙：雫、という、熱さと冷たさのいりまじった水性のイメージが、接吻の場面を縁取っている。

『夢十夜』の百合のように、美しい女性の屍は、漱石においては冷たい清らかな花に結びついていくものだった。息絶え、冷たくなった女性の額に接吻するという夢想は漱石の心を引きつけるものであったようで、美妙的な死体にくちつけるというエピソードは、『行人』（大正元年～二年）の中でも繰り返されている。

語り手の友人・三沢と、三沢の家で預かっていた、心労から精神に異常をきたしていた娘に、三沢がした接吻の事を、語り手は兄から聞かされる。ここでは、生前にはこの娘と触れ合うことの無かった三沢が、娘の死後その屍の額に接吻したという話題が、興味と同情をもつて語られている。漱石によつて、同時代の日本を背景とする作品

で接吻が描かれた希有な例であるが、伝聞の形で、その場に他に人がいたのか等の実際的な背景は明らかにされないままで語られ、はっきりとした現実感を持たされないまま、輪郭が不確かなままにされてもいる。狂気の娘の屍とは、『草枕』において、画工の強いオブセッションになつてゐるオフィーリアのイメージと繋がつていよう。オフィーリアはまた、純潔を意味する白い花のイメージとも関連する。漱石の描く接吻の場面には、彼女の影が差しているようだ。

「日本の新体詩人は西洋の詩から接吻と云ふ字を発見して一般の趣味の異なる日本に此字を引入れて来て平気で使つて居る、然し此字に対する普通の人の趣味は新体詩人が用ひる様な意味を有して居らん」。そう述べていた漱石は、「一般の趣味の異なる日本」にあつて接吻を描こうとするときには、どうしても、実際から離れた場の設定を必要とした。漱石が作品中に描いた接吻は、「くちすい」ではなく、西洋で目の当たりにした、「執濃イ、華麗ナ」接吻とも、またダナンチオ的な技巧に満ちた接吻とも異なる。西洋人が、自分たちは愛を性と切り離して考えることができていると信じている、それをも“self-delusion”と考へていた漱石は、性と切り離された「恋愛」というものに対して、根本的な胡散臭ささえ感じていたように見える。しかし、彼のうちにそのような「恋愛」に憧れる思いもまたあり、だからこそその作品の中で、徹底して夢を描いた、生身の匂いのしない、完全に観念的な接吻を描いたのではないだろうか。

ついに、口同士が生まに触れ合う接吻は描かなかつた漱石は、美しい花への讚美、崇拜の感情の発露であるような接吻を描いた。愛する者へ惜別の挨拶としての接吻、セクシュアリティから離れた、愛、彼岸と此岸の触れ合い、

霊への接触そのものとしての接吻を描いた。⁽³⁾ その場面は、彼の美意識に照応する形に、丁寧な構築されている。

註

(1) 江戸以前の口腔接触の記述としては、秀吉の手紙での例がよく知られていよう。これは、子供に対する所作であるが、まだ文字の読めるはずもない幼い子にあてた、背景に子の母への愛着を感じさせるこの例以外は、愛欲の行為のものになる。

(2) キリシタン文章における接吻の表現については、米井力也氏「PRELUDE TO A KISS」(京都大学人文科学研究所『人文学報』第七十五号 一九九五年)に詳しい。

(3) 例外的に、漱石が接吻を現実の日本を舞台として書いた作品として『道草』があり、健三の細君と赤ん坊の接吻が二箇所繰り返される。「御父様の仰しやる事は何だかちつとも分かりやしない」という台詞ともになされる母子の接吻は、理屈優位の世界にいる健三に対して、肉体的存在としての細君の他者性を際立たせている。

(大学院後期課程学生)

The History of Kiss in Japan

Ryo NISHIZAWA

In present-day Japan, kiss is thought to be the symbol of the so-called "romantic love." It is thought that kiss becomes both of the symbols, erotic love and mental love. In order to point out kiss, each word generally used now is a translation word which spread after the Meiji period. Lafcadio Hearn, Chamberlain, etc. declared, "in literature of Japan, kiss is not described at all." However, there was a custom of contacting mouths also in Japan, in practice. The custom was called "*kuchisui*." "*Kuchisui*" differed from kiss which aims at contact of lips. It was the purpose of an act that contacts tongues. Mouth contact in Japan before "kiss" was the act of Eros which should be done secretly at a bedroom. However, as a sacredness greeting, kiss was brought from the West with Christianity.

People were strongly conscious of the difference in customs which the difference between "kiss" and "*kuchisui*" causes. It was thought that the difference in this custom showed the cultural difference symbolically. Translation of the Western literature which drew kiss as a symbol of love started. From the middle of Meiji, "kiss" comes to be described not as the symbol of "lust" whose "*kuchisui*" was so but as a symbol of "romantic love."

Soseki Natsume wrote to the diary as follows during studying abroad ; "An European likes a persistent thing and a gay thing. (...) That can be confirmed by seeing them kiss in the public place. All of such character are being reflected also in literature." He considered

various things from the east-and-west difference in mouth contact. Soseki criticized as follows about the Japanese writer of those days writing kiss easily ; “Japanese poets find out a word called kiss from Occidental poetry, and draw in and use this word for Japan where taste differs. However, an ordinary person’s feeling to a word called kiss greatly differs from poets’ feeling. Therefore, if such a poet’s poetry is read, a kind of sense of incongruity will be felt. I can consider as they are only telling the lie.” Furthermore, he thought the European thought that sex could be separated from love to be self-delusion. He seems to have felt the fundamental doubt to the thing “love” separated from the sex. When Soseki put a kiss scene into his own work, the situation that the background of a tale separated from reality was chosen. For example, it is in the West of a medieval-times time, and in a dream. The yearning after “romantic love” is also in his inside. He wrote completely ideological dreamlike kiss in his works.

キーワード：接吻 夏目漱石 異文化交流 セクシュアリティ 口吸い